法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-31

沖縄の妖怪

新里, 幸昭 / SHINZATO, Kosho

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
21
(開始ページ / Start Page)
143
(終了ページ / End Page)
188
(発行年 / Year)
1995-02-28
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002554

Hosei University Repository

沖縄の妖怪

新里幸昭

一、はじめに

ウンダガーでピキンキルが泳いでいたから一人で泳ぎに行くなよ、ウフミチメーには、チーワーワーが夜歩いていたので気をつけなさいよ、といっていた母の言葉が思い出される。一人で泳いでいると足を引っ張って溺れさす妖怪ピキンキル、夜遅くまで遊び惚けている子供の股下をくぐってその魂を取ってしまう豚の妖怪チーワーワー、奥山に一人で行くと道迷いをさせたり、たきぎのうえにのったり、荷を引っ張ったりして、里に帰さないようにする妖怪シッキー、そして蟹捕り・魚捕りの上手なブナガヤのような妖怪が、大宜味の喜如嘉だけでなく、沖縄の各地にいたようである。

Hosei University Repository

これら沖縄の妖怪の中のキヂムナーについては、古くは一七四六年の『遺老説伝』にもその記述があり、近年には一九八二年渡嘉敷守の「キジムナー考」がある。後者は、沖縄本島とその周辺の島々一一七地点の調査報告であるとともに『遺老説伝』以降の文献資料も駆使し、キヂムナーの分布とその正体を明かにしている。

管見するところ、これまでの研究の多くがキヂムナー中心であり、その他の妖怪についてはあまり追求されてないようである。そして最近では、これら妖怪についても語ることも少なくなり、記憶の彼方に押しやられようとしている。そこで、沖縄とその周辺の島々にはどのような妖怪がいたか、その全体像をデッサンするために、このテーマを設定した。

なお、この報告は、昨年七月から十一月までの間と一九九四年五月から七月までの筆者の調査に基づくものである。

調査は、次の質問事項を念頭にいれて、時には例を喜如嘉にとり実施した。

1. あなたの部落には、どのような名前の妖怪がいますか。
2. それは、いつ、どこに、どのように、現れますか。
3. どのような性格で、どのような活動をしますか。

被調査者は、その地生え抜きの五十歳から九十歳までの方や言語形成期をその土地で過ごした方々である。

一一〇の調査地点と被調査者は次の通りである。氏名の後は生年を表す。明治大正昭和の頭文字をとってMTS何年とする。

国頭村・・・・安波（玉城オメトM45、当山カナM45）・安田（大城ヨシT2、武徳T2）・奥（比嘉グジT9、秀敏S20）・辺戸（上原春子S8）・宜名真（宇良宗三郎T13）・宇嘉（山城兼次T2）・辺野喜（高江州清　S6）・謝敷（大城貞一T14）・与那（翁長タケM45）・宇良（玉城猛S17）・辺土名（親川蔵正T2）・奥間（平岡カメM41、奥間前栄T7）・比地（金城珍秀S17）・半地（松田スミS6）・浜（金城盛作S10）

大宜味村・・・田嘉里（大嶺苗M37、金城一夫S14）・謝名城（大城カヨT6）・喜如嘉（新里幸昭S17）・大宜味（山川勇S16）・根路銘（宮城倉栄M40）・上原（照屋武光S29）・塩屋（島袋義幸T2）・田港（前田スミT3、山城亀松T7）・津波（前田松雄T14）

東　村・・・・川田（金城孝T15、仲本政栄T11）・平良（宮城徳善T3）・有銘（比嘉仁昌T6、仲嶺真雄T8）・慶佐次（比嘉正継S11）

名護市・・・・源河（小橋川森松T6）・稲嶺（与那嶺新徳M38）・仲尾次（宮城良夫S2）・川上（宮城幸源T2、宮里キヨS8）・田井等（宮里寛S12）・振慶名（大嶺太高T6）・伊差川（大城新徳T8）・済井出（宮城美代子S23）・饒平名（大城律子S18）・安和（長山豊造T14、宮城嘉辰S15）・屋部（比嘉久S33）・城（比嘉親平S4、岸本豊秀S14）・数久田（玉城栄徳S5）・許田（金城親栄M31）・天仁屋（島袋正敏S18）・安部（池原イツT6、久志秘露子T14）・汀間（山内範正S15）・辺野古（比嘉清T13）・久志（宮里健一郎S16）

今帰仁村・・・湧川（仲里トメT10）・仲宗根（大城キヨM35）・謝名（仲間光枝T7、仲原弘哲S25）・平敷（仲里双徳T10）・与那嶺（金城新治T13）・諸志（内間昭光S16）

本部町・・・・北里（金城幸子S15）・具志堅（金城セツT4）・備瀬（玉城マツT9）・渡久地（玉城正博S17）・瀬底（奥浜千代子S23）・伊豆味（兼城京子S25）

宜野座村・・・松田（松田繁敏T14）・漢那（仲間カナM36、武則S14）

金武町・・・・金武（宮城英子S13）・屋嘉（前田昌紀S10）・伊芸（安富祖平進M42、朝秀T7）

Hosei University Repository

恩納村・・・・安富祖（島袋ヤス子S12）・仲泊（長浜末子S6）
読谷村・・・・長浜（金城春子S15）・波平（比嘉国弘S18）・喜名（嘉手苅林勇S16）・伊良皆（伊波敏和S22）
石川市・・・・石川（石川真山S3）・伊波（新田フミT6）
具志川市・・・・昆布（座間味敏子S7）・平良川（稲福文子S8）・具志川（宮城和之S20）
与那城町・・・・西原（島袋真栄S14）・平安座（与那原勝也S17）
中城村・・・・泊（小橋川順市S24）
嘉手納町・・・・嘉手納（伊波義祐T14）
北谷町・・・・吉原（比嘉文子S5）
宜野湾市・・・・普天間（河合桂子S22）・大山（又吉ヨシ子S15）・我如古（又吉ツルT2）
浦添市・・・・西原（比嘉正三郎T11）・宮城（仲西弘S11）・経塚（金城竹子S2）
那覇市・・・・西新町（野原三義S13）・首里（知名定興M45）
豊見城村・・・・高安（平田悦子S24）
南風原町・・・・与那覇（新垣勝大S18）・喜屋武（野原広亀S9）・神里（島袋政子S16）・津嘉山（大城盛昌S12）
大里村・・・・大里（伊波行良T10）
与那原町・・・・与那原（津嘉山笑美子T2）・当添（仲里チヨT9）
佐敷町・・・・小谷（知念カメM45）・佐敷（与那嶺トシM42）・屋比久（宮城徳仁M42）・仲伊保（小波津守一T5）
知念村・・・・海野（外間伊一T13）・山里（普天間良子S16）
玉城村・・・・百名（森山紹久S17）
具志頭村・・・・堀川（亀山隆S30）・具志頭（高良清喜S24）
糸満市・・・・糸満（大城盛保S25）
伊平屋村・・・・野甫（金城ツネT5）
伊是名村・・・・勢理客（末吉武光S12）
粟国村・・・・浜（伊良皆宗謙S22）
渡嘉敷村・・・・渡嘉敷（与那嶺忠夫S11）
具志川村・・・・具志川（宮里シゲT11）

調査地点

Hosei University Repository

二、妖怪の種類と分布

ここで言う妖怪とは、沖縄本島とその周辺の島々で伝えられている得体の知れない不思議なもの、恐ろしいもの、あるものが姿を変えたもの、化物である。すなわち広義のマヂムン、キヂムン、マブイなどと呼ばれているものである。ここでは幽霊・遺念火などは取りあげなかった。

古く柳田国男の妖怪の分類もあるが、ここでは筆者の出身地喜如嘉の妖怪に基づいてその性格から大きく分類してみた。まず（一）蟹・魚採りが上手また寝ている人を押え金縛りにしたり、友人となった人間の漁などを手伝って幸せをもたらしたり、時には不幸をもたらしたりする妖怪、（二）山や野原などで道迷いをさせたりして惑わす妖怪、（三）川や海で人間の足を引っ張ったり、誘ったりして溺れさす妖怪、（四）動物の姿をして人間の股下をくぐり抜けて魂などを抜き取ったり、襲いかかって来る妖怪、（五）物に化けて襲いかかってくる妖怪、（六）その他の特殊な妖怪である。

（一）は、木の精ともいわれているブナガヤ・キヂムナー系の妖怪である。これは、渡嘉敷が指摘するように地域によってその呼称が異なる。キヂムナー系の呼称は、中・南部そして半地以北の国頭村に分布し、大宜味村や東村・宜野座村松田・金武町伊芸のブナガヤ系、羽地のボージマヤー系、本部半島のセーマ系と分布を示している。が、その性格や行動からみて同一系統のものであるかはにわかに決めがたい。蟹や魚採りをするということや身長や形ではほぼ共通するが、キヂムナーが人間を襲い金

縛りにしたりするのに対して、ブナガヤなどは彼の漁場に侵入するものに対しせいぜい灸をすえる程度である。そして前者が昼夜区別なく季節に関わりなく現れるのに対して、後者ブナガヤの多くは旧暦八月九日から十六日までの夜にしか現れない。が、他と比べて共通する点が多いのでひとまず従来どおり同一系統としておく。

（二）は、シッキーとかシチとかよばれているシッキー系とムン系などの妖怪である。アリヤ　シッキー（ムン）ニ　ムタッティ　トゥカン　ヤマネー　ウイタンドー（彼はシッキー（ムン）に迷わされて十日間も山の中に閉じ込められていたよ）という話を提供してくれる妖怪である。正気の場合には出来ないようなこともさせたりするものである。

（三）は、人間を水の中に引きずり込んで溺れさすという意味のピキンキル、スンカー、ヒッパヤー、ヒサヒッパヤーなどのピキンキル系の妖怪と得体の知れない妖怪の意味のマヂムンとか迷わす意味のマヤーサーやフカゾークークー、ビーチョー、カーガーマヂムン、カーブラングヮ、マー、セーマーグヮーなどが、このグループである。

（四）は、動物の妖怪である。これには、豚・牛・あひる・山羊・犬・猫・うさぎの姿かたちをした妖怪で、人間の股下をくぐり抜け魂を抜き取っていく、あるいは、人間を襲い、断崖絶壁に誘い込んで落下させるような妖怪である。

（五）は、チニブマヂムンなどである。チニブ（竹垣）に姿を変えて襲いかかってくるものなどである。

Hosei University Repository

(六)は、背比べをし自分より低いもののマブイをとったり、火の玉や猫に変身してじゃれついて惑わしたり、通り全体を覆って人間を包み込んでマブイをとってしまうシッチマヂムン系の妖怪やイシナギマヂムン（石投げの妖怪）などである。

(一) ブナガヤ系の妖怪

この妖怪はその特徴から村によって次のように呼ばれている。(6)は、カ行子音のハ行子音化による村落の方言差による呼称である。（ ）の中にその意味を示す。呼称は平仮名片仮名まじりで音声表記した。片仮名表記の前には声門破裂音が付くことを表す。但し、文章中では、弁別する必要がある時以外はすべて片仮名で記した。

(1) アかがんたーわらび（赤い髪の子供）
(2) アかたにぼーづ（赤い男性器の童）
(3) ぶながい・ぶながや・ぶなんがや（髪が乱れているのを、ブナガトーン、という。その者の意か。）
(4) ぼーぢまやー（ボーヂは子供で、マヤーは猫か。猫のような小さなすばしっこい子供という意か）
(5) がやぶやー（茅ぶきの家のことを言うが、乱れた頭髪の格好からつけられた名か）
(6) きぢむなー・きぢまなー・きぢむん・ひぢむなー・ひぢむん・ぴぢむん・ぴどぅむん（木の精ともいわれる。キジュン・キジャースン「撹乱させる」ものという意味か）

(7) やんばさかー（髪の乱れている者という意か）
(8) せーまー・せーま（髪が短くちぢれているのを言う。その意か）
(9) ふるふぁが（未詳）
(10) しのーらきぢむなー・しのーらきぢむん・しのーりきぢむなー（山や里にいたのに比べて、入り江・河口にいたので言うようであるが未詳）

この妖怪の性格・行動・特徴などを、村落では次のように述べている。

(1) 黒い色をしている。そして寝ている人間を襲い金縛りにする（辺戸）。
(2) 赤い色をしている。そして寝ている人間を金縛りにする（宜名真）。
(3) 川で蟹や海老が赤くなって死んでいるのはこの妖怪の仕業である（辺野喜）。
(4) 人を押さえつけて金縛りにする（久米島具志川・浦添西原）。
(5) 人を押さえつけて金縛りにする。人間の漁の手伝いをする。捕った魚には片目がない（渡嘉敷）。
(6) 寝ていると体を押さえつけて金縛りにする。古いガジマルが住処でそれに釘を打って除ける（具志頭）。
(7) 相撲を挑戦し人を襲う。左綱をないそれを腰に巻いて相撲をとるとこの妖怪に勝つ。漁を手伝う。彼が捕獲した魚には片目がない（堀川）。

Hosei University Repository

(8) きぢむなーに　ウさーさりん（百名）。

(9) ガジマルが住処である。これと友達になると大漁をさせてくれる。屁をすると逃げる（山里）。

(10) 人を押さえて金縛りにする。キーヌシー（木の精）という（与那・我如古）。

(11) チーグサ（茅）の原が遊び場で古いガジマルに住んでいた。海人を海に案内して大漁させた。彼は魚の片目を食べた。海に連れて言ったことを他人に話してはならないと言う彼との約束を破って話したら灸をすえられた。その後海に連れて行ってもらえなかった（喜名）。

(12) 人を押さえる。魚とりを手伝う話は聞いたことがない（波平）。

(13) 人を押さえつける（長浜・饒平名・瀬底・諸志）。

(14) 古木の股に住んでいる。アカガンター（赤髪）。眠っている時蚊帳の中に入って人を押さえつけて金縛りにする。いたずら者（平良川）。

(15) 魚を捕ってくれる。但し目玉だけは彼が取る。男性を押さえつけるものはミームナー（雌）で、女性を押さえるものはウームナー（雄）である（石川）。

(16) 夜口笛を吹くと現れる。海にも入る。土を食べさす。野山に連れて行って迷わす（野甫）。

(17) 幽霊みたいなもの（勢理客）。

(18) きぢむなーに　すんかりーんどー（泊）。

(19) 木の精。押さえつける。魚捕りを手伝う。木の精にもたれた時ブーブーすると血はでず木の汁が

出た。きぢむなーに　むたりーん（安富祖）

(20) 人を押さえつけて金縛りにする。馬がこの妖怪を良くみる。これがいると立ち止まって全く先に進まない。友達になると漁を手伝ってくれる。（天仁屋）

(21) 人を襲う。公民館で寝ていると灸をすえられた。これを見るために旧暦八月八日ごろには小屋を造った。（上原）

(22) 木の精。住処のアカギに網を干すために釘を打ったところそのたたりにあった。家の門の五メートルばかり離れた道路沿いにその木があり、夜家に帰ろうとするが、その木の所に来ると絶壁になりそこから先に進むことが出来ない。そこを避けて同じ所を三度もぐるぐる回されていたようである。友人に声をかけられて我に帰ったようである。このようなことが三回もあった。そのうえ家で昼寝をしているところを襲われたことがあった。三十・四十センチぐらいで色の黒い子供みたいな格好をしていた。釘を抜き、木の精にお詫びの祈りを捧げたら許された。（辺土名）

(23) 昼や夕方、山や畑に現れる。スルガー色（黒茶色）の顔をした上半身が長く足の短い〇脚の足で、小さな妖怪。（田嘉里）

(24) 古木の精。ウスクガジマルなどに住んでいた。（大里）

(25) 人を押さえる。人を迷わし、土を食べさせる。きぢむなーに　むたったん（津嘉山）

(26) きぢむなーに　むたとーん。きぢむなーぬ　ウさーとーん（神里）

Hosei University Repository

(27) きぢむなーに　ウさーりん（喜屋武）

(28) 魚を捕ってくれるが片目を取る。入り江の周辺や河口・港近辺にいた。シノーリキヂムナーともいう。（城）

(29) 夜道を歩いて、この妖怪を蹴り飛ばした時には仕返しをされた。（粟国村浜）

(30) 火を持っている。蟹や蝦が大好きで、赤くなったその死骸はこの妖怪の仕業だと言う。（宇良）

(31) 赤い髪のおかっぱで山に住んでいる。海で貝で拾って食べている。魚を捕って漁師にあげる（済井出）。

(32) 人を押さえつけて金縛りにする。火傷もさせる。川とか大きな木の周辺にいる。（仲尾次）

(33) 寝込みを襲う悪い奴。（安和）

(34) 他地域で言うキヂムナーのこと。（屋部・普天間）

(35) 寝ている人を押さえて金縛りにする。木の精で川べりや川の淵、山の淵にいる。魚を捕らない。（城）

(36) 寝ている人を襲い金縛りにする。道迷いをさせる。狛獅子のようなもので、山の中にいて奥山の途中まで人を誘い消える。（謝名）

(37) せーまーに　ウさーさりーん（渡久地）。

(38) 他地域に言うキヂムナーのこと。体は小さくて裸である。小さな女の子のようなおっぱいをしている。せーまに　ウさーさーりん（北里）

(39) 火の玉になって人間に近づいて来る。漁師が捕った魚の目玉を取る。（久米島具志川）

(40) 夜、山や畑に現れる。ブナガヤに似ている。六又と言う家はブナガヤが資材を運びたてたものだと言われている。（田嘉里）

(41) この妖怪と友達になると魚を取ってくれる。が、その魚は必ず片目が抜かれている。夜海によく現れる。舟に乗っているときにこの妖怪が来る場合、海の上から明るくなって来る。友達のように振舞っていると魚とりを手伝って大漁にしてくれる。（田井等）。

(42) 川に蟹やえびの赤い死骸があるのはこれが食した痕だと言われている。旧暦八月八日にはこれを見るために櫓を造って人々はこれ潜んでいた。（半地）

(43) 川で蟹を取って食べる。指で甲羅を刺してそれを捕獲する。山で伐採をしていると手伝ってくれる。焚火の中に竹を入れて燃やしパンと音をさせると逃げる。（上原）

(44) ブナガヤ　ホイホイ　と言って　ユウナの木で造った剣で垣根を叩いて、それを追い出す行事を毎年旧暦八月に子供達はしていた。（大宜味）

(45) 山川や井泉にあらわれる。蟹捕りをしていると灸をよくすえる。川にその食い残しの殻をよく残す。海にも入り魚を捕る。漁師の手伝いもする。捕った魚には片目がない。それは彼が食した痕だと言う。たこやおならは嫌いだという。（喜如嘉）

Hosei University Repository

(46) 赤い着物を着た赤い髪の小さな妖怪。古木の根っこで光っていた。これをブナガヤビー（ブナガヤ火）を出すと言う。これをタンガイともいう。（謝名城）

ブナガヤ系の妖怪の呼称は、①髪が乱れている姿からまず名づけられている。ブナガヤ・セーマ・ガヤブヤー・ヤンバサカーなどがそれである。②次に髪の色合いのアカガンターワラビ、③体つきや色合いのアカタニボーツ、④木の精で人を惑わし攪乱させる意であろうキヂムナーなど、⑤現れる場所との関わりのシノーラキヂムナー、⑥その他、となるだろう。

その体つきについて言うと、①身長が四十ないし六十センチの子供ぐらいの大きさである。②子供の姿、③蝶の形（瀬底内間直仁S14）、④男女の別があり男性は大きな性器をぶら下げている、⑤小さな女の子のようなおっぱいをしている。⑥黒い色をしている、⑦赤い色をしている、などである。

その性格や行動は、①寝込みを襲い金縛りにする、②惑わす、③灸をすえる、④その友人に対しては、漁・家の建築・材木の切り出しや運搬を手伝う、⑤彼を裏切った者に対しては仕返しをする。灸をすえる・惑わすだけでなく、粟国に伝えられているように人間がした行動と同じく家を焼きその家族を殺す、などである。岩手県に伝わる座敷童子とかなり類似している点があることが判る。

その呼称と村落名を示すと次のようである。

a1　アかがんたーわらび（普天間）
a2　アかたにぼーづ（辺野古）

b1　ぶながい（半地・上原・塩屋・田港）
b2　ぶながや（半地・浜・田嘉里・謝名城・喜如嘉・大宜味・根路銘・津波・平良・川田・松田）
b3　ぶやがやー（伊芸）
b4　ぶなんがや（稲嶺）
b5　ぼーぢまやー（仲尾次・川上・振慶名・田井等・伊差川）
F　ふるふぁが（田嘉里）
g　がやぶやー（屋嘉・金武）
h1　ひぢむなー（辺戸・宜名真・与那・辺土名）
h2　ひぢむん（安波・辺野喜・謝敷）
h3　ひどぅむん（奥）
p　ぴぢむん（安田・宇嘉・奥間・比地）
k1　きぢむなー（奥・上原・有銘・慶佐次・天仁屋・安部・汀間・伊豆味・城・安富祖・仲泊・長浜・波平・喜名・伊良皆・辺野古・漢那・屋嘉・伊芸・石川・伊波・昆布・平良川・具志川・与那城町西原・嘉手納・吉原・大山・泊・我如古・浦添市西原・宮城・経塚・西新町・首里・高安・津嘉山・喜屋武・神里・与那原・当添・小谷・佐敷・屋比久・仲伊保・海野・山里・百名・大里・堀川・具志頭・糸満・野甫・伊是名村勢理客・粟国村浜・渡嘉敷

Hosei University Repository

・具志川村具志川）

k2　きぢむん（与那・宇良・津嘉山・粟国村浜）

k3　きぢまなー（伊豆味）

j　やんばさかー（済井出・饒平名）

m　みちばたー（源河）

s1　せーまー（平敷・与那嶺・諸志・渡久地・屋部・城）

s2　せーま（源河・伊豆味・湧川・仲宗根・謝名・具志堅・備瀬・北里・瀬底・安和）

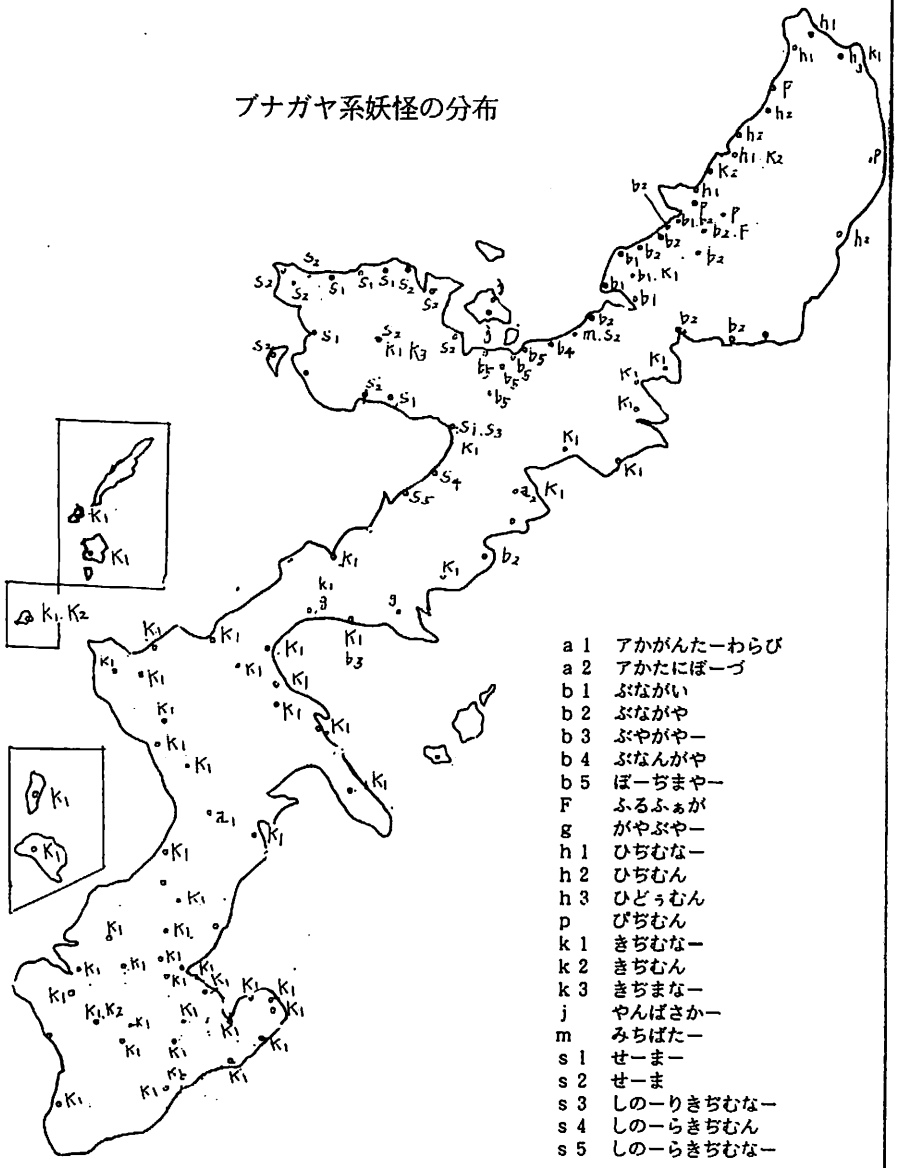
s3　しのーりきぢむなー（城）

s4　しのーらきぢむん（数久田）

s5　しのーらきぢむなー（許田）

妖怪の名前の分布図には、それぞれの頭文字をとった記号で示すことにする。

ブナガヤ系妖怪の分布



a1　アかがんたーわらび
a2　アかたにぼーづ
b1　ぶながい
b2　ぶながや
b3　ぶやがやー
b4　ぶなんがや
b5　ぼーぢまやー
F　ふるふぁが
g　がやぶやー
h1　ひぢむなー
h2　ひぢむん
h3　ひどぅむん
p　びぢむん
k1　きぢむなー
k2　きぢむん
k3　きぢまなー
j　やんばさかー
m　みちばたー
s1　せーまー
s2　せーま
s3　しのーりきぢむなー
s4　しのーらきぢむん
s5　しのーらきぢむなー

Hosei University Repository

bのブナガヤ系が国頭村半地から大宜味村一帯そして東村、旧羽地村の稲嶺、宜野座村松田、金武町伊芸にも見える。塩屋の海神祭などの祭祀空間・生活空間の関わりで東村や大宜味・国頭村の一部に分布しているようである。が、松田や伊芸は歴史的にどのような関連があったのだろうか。またbのボーチマヤー系がハネチタープク（羽地田園）を生活空間とした旧羽地村、jのヤンバサカー系が旧屋我地村、sのセーマー系が本部半島に分布し、それ以外の地はほとんどkのキヂムナー系である。宜名真・上原・有銘・伊豆味などは廃藩置県後首里那覇から移住してきた人々によって創られた村落と言われ、子供達は出身地の言語を厳しく禁じられたようである。そのために中南部系の方言が出てくるのであるが、上原・伊豆味は、周辺の言語の影響を受けて混用している地域でもある。東村平良・川田、大宜味村根路銘・田港・塩屋・津波でも若い人達には、古い呼称のブナガヤが忘れられつつある。そしてキヂムナーがよく使われるようにもなっている。国頭村などのキヂムナー系は、中南部との薪などの交易・出稼ぎによる人々の出入りや中央語に対する心理的影響の現れではないだろうか。源河のミチバターは、喜如嘉の田圃道にでるのをアブシ（畦）ブナガヤとよぶ命名法に同じく現れる道端に由来するものであろう。田嘉里のフルファガや金武・屋嘉のガヤブヤーも古くは他地域でも言われていたかも知れない。城・数久田・許田のシノーラキヂムン系等は、キヂムンなどと弁別し名づけられたようである。

（二）シッキー系の妖怪

この妖怪は、主に山野で道まよいさせたり、正常な時にはできないことをさせたりするものである。この妖怪の呼称と村落は次のようである。

s1　しき（安和・漢那）
s2　しきー（振慶名）
s3　しち（仲尾次・川上・北里・城・許田）
s4　しっきー（安波・安田・宇嘉・辺野喜・謝敷・田嘉里・謝名城・喜如嘉・大宜味・根路銘・上原・塩屋・津波・川田・平良・田井等・屋嘉）
s5　しっちー（辺戸・宜名真・与那・宇良・辺土名・奥間・比地・半地・屋部）
s6　すーき（伊芸）
s7　しーきー（金武・屋嘉）
s8　しきん（稲嶺・慶佐次・松田・数久田）
s9　しちむん（饒平名）
s10　しちなむん（源河・謝名）
s11　しー（諸志）
s12　しらむーむー（源河）

Hosei University Repository

h1　ひち（具志堅・具志川）
h2　ひちー（伊差川・湧川・平敷・与那嶺・備瀬）
h3　ひっちー（仲宗根）
h4　ひどぅむん（奥）
j1　やまぢっきー（塩屋・田港・津波）
j2　やなむん（嘉手納）
m1　むん（有銘・瀬底・安部・汀間・辺野古・安富祖・伊芸・石川・仲泊・長浜・喜名・波平・伊良皆・吉原・平良川・西原・泊・大山・我如古・浦添市西原・経塚・西新町・与那覇・与那原・当添・小谷・佐敷・屋比久・仲伊保・海野・山里・百名・大里・高安・粟国村浜・具志川村具志川）
m2　まぢむな（伊良皆）
m3　まぢむん（具志頭・糸満・渡久地）
m4　むったりむん（屋嘉）
T　たまし（済井出）

村落では、この妖怪の特徴などを次のように語っている。

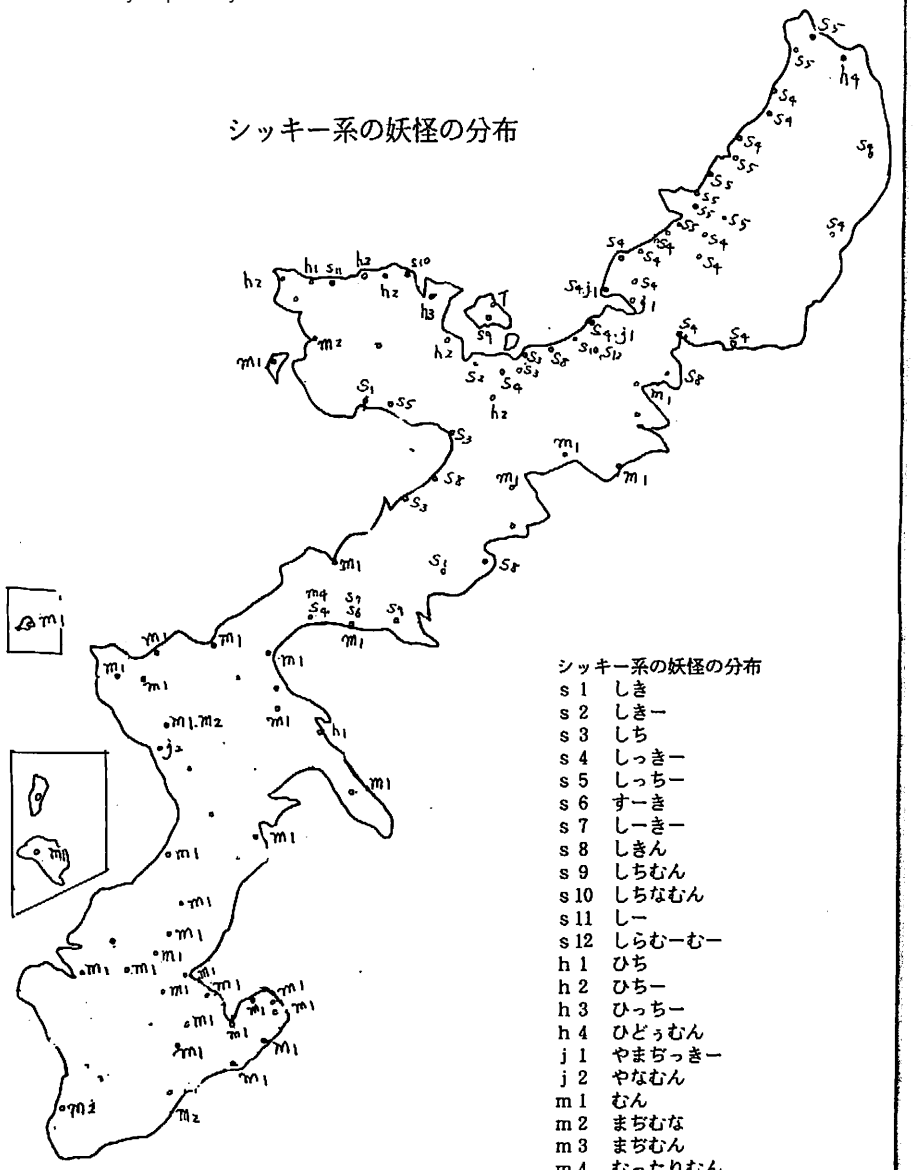
(1) 山などで道迷いをさせたぶらかす。（辺戸・宜名真・宇嘉・辺野喜・与那・喜如嘉・上原・饒平名・仲尾次）
(2) 宇嘉山はシッキーがいるのでそこに行くのは注意された。（辺野喜）
(3) しっちーに　むたっとーん（辺土名）
(4) 昼間・夕方どこにでも現れ人を襲う。ブナガヤのこととも言われている。（田嘉里）
(5) アラミの時にみた。（謝名城）
(6) 山奥に誘い道迷いをさせる。薪の上に乗って重くしたり、それを引っ張って帰さないように邪魔をする。（喜如嘉）
(7) しっきーに　むたったん　という。（大宜味・上原・田井等）
(8) しっちーに　むたりーん（北里）
(9) むんに　むたいん　山で道迷いさせたり、夜中に家を飛び出させたりすることに言う。ムーチーガサを採りに朝の十時に行って夜の九時頃帰ってきた人がいた。その間夢遊病者のようで何をしていたか分からないと言う。これを言う。むんに　ウすらってぃ　みーくげー　ならん（ものに押さえつけられて身動きが出来ない）（汀間）
(10) 山や野原で道迷いをさせたり迷わしたりする。むんに　むたったん（瀬底）

Hosei University Repository

(11) むんに　むたりーん（安富祖・平良川・那覇）
(12) むんに　むたっとーん（与那城村西原・経塚・当添・小谷・山里・百名）
(13) 時間も場所もなく現れて人を呼んで連れて行く。火の中水の中所構わず人を置き去りにする。（平良川）
(14) 道迷いをさせる。むんかい　むたったん（長浜・波平）
(15) むんに　むたりーん　墓に連れて行かれて赤土を食べさせられていた。（泊）
(16) 人を迷わし道迷いさせたりする。迷わされたのをムヌマイーされたと言う。（我如古・浦添市西原）
(17) むんに　むたってぃ　むぬまい　そーん（大里・佐敷・屋比久）
(18) むんに　むたいん（仲伊保・海野）
(19) 亡くなった人が成仏できなくて豚の妖怪になって道を歩いていると言う。（山里）
(20) 日常出来ないことをさせられる。高い石油タンクを飛び越えさせたり、浜辺を何度も往復させたりする。（粟国・浜）
(21) 人を迷わす。これを　むんに　むたったん　とか　やなかぢに　アたったん　という。（久米島・具志川）

分布図を示すと次の通りである。

シッキー系の妖怪の分布



シッキー系の妖怪の分布
s 1　しき
s 2　しきー
s 3　しち
s 4　しっきー
s 5　しっちー
s 6　すーき
s 7　しーきー
s 8　しきん
s 9　しちむん
s 10　しちなむん
s 11　しー
s 12　しらむーむー
h 1　ひち
h 2　ひちー
h 3　ひっちー
h 4　ひどぅむん
j 1　やまぢっきー
j 2　やなむん
m 1　むん
m 2　まぢむな
m 3　まぢむん
m 4　むったりむん
T　たまし

Hosei University Repository

シキ・シキー・シチ・シッキー・シッチー・スーキ・シーキー・ヒチ・ヒチー・ヒッチーという呼称は、村落の方言差によるものである。その語源は精気なのか定かでない。シキン、シチムン、シチナムンは、前者に他の形態素「ン、モノ（もの）・ノモノ（のもの）」が後接したものであり，ヤマヂッキーは「ヤマ（山）」が前についた形である。シッキーとは村落によっては海鼠にも言い、これと区別するためにヤマがかぶせられたものである。落葉などの蔭にいて海鼠と似ているという（喜如嘉）。

ムンは、たたりをする物の気のものであろう。ムッタリムンは、人の心を弄ぶものの意であろう。タマシは魂で、人心を惑わす死霊のことである。ヒドゥムン・ヤナムン・マヂムンは、心をかき乱し惑わす嫌なもの魔物という意味である。具体的な名称の付いた妖怪がいない時も、妖怪の総称としても用いられる。シラムームーは未詳。

シッキー系は山に多く現れるという点で、ムン系とは異なる。これらの妖怪は、人心を惑わし夢遊病者のように振りまわすところに大きな特徴がある。シッキーにはヒダル神の要素もみえよう。

その分布は、シッキー系が沖縄本島北部方言地域、ムン系が中南部方言地域に分布しているといえそうである。仲泊と石川を結んだ線より北の村落のムン系は、その村の成立ちや生活空間との関わりであろう。

(三) ピキンキル系の妖怪

この妖怪は海や川沼などにいて、人を水の中に誘い溺れさすものである。これには次のような呼び名と村落がある。

a1　アしすんちゃー（許田）
a2　アしひっぱやー（田井等・饒平名・大里）
b　びーぢょー（天仁屋）
c1　つーすんかー（田港）
c2　つーすんちゃー（川田）
c3　つーひっぱやー（伊芸）
c4　つーうぶかさ（屋嘉）
F1　ふぃさすんかー（辺野古）
F2　ふぃさひっぱやー（漢那）
F3　ふぃきんきむん（塩屋）
F4　ふかぞーくーくー（平安座）
h1　はーまぢむん（安田・安波・伊差川）

Hosei University Repository

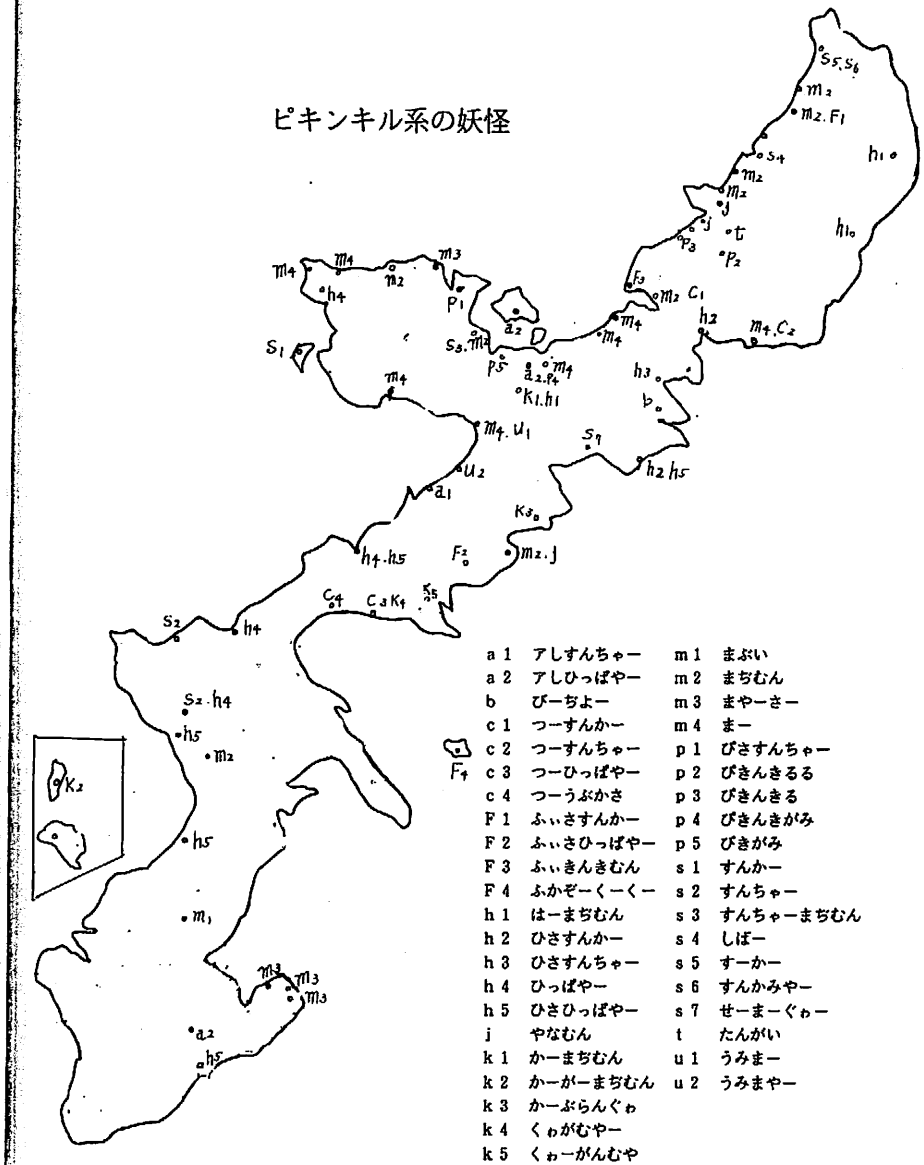
h2　ひさすんかー　（平良・安部）
h3　ひさんすちゃー　（有銘）
h4　ひっぱやー　（北里・安富祖・仲泊・伊良皆）
h5　ひさひっぱやー　（安部・安富祖・嘉手納・大山・堀川）
j　やなむん　（奥間・半地・松田）
k1　かーまぢむん　（伊差川）
k2　かーがーまぢむん　（渡嘉敷）
k3　かーぶらんぐゎ　（久志）
k4　くゎがむやー　（屋嘉）
k5　くゎーがんむや　（金武）
m1　まぶい　（西原）
m2　まぢむん　（宇嘉・辺野喜・宇良・辺土名・田港・湧川・与那嶺・松田・吉原）
m3　まやーさー　（謝名・屋比久・沖伊保・海野）
m4　まー　（津波・川田・源河・川上・具志堅・備瀬・安和・城）
p1　ぴさすんちゃー　（仲宗根）
p2　ぴきんきるる　（謝名城）

p3　ぴきんきる　（喜如嘉）
p4　ぴきんきがみ　（田井等）
p5　ぴきがみ　（振慶名）
s1　すんかー　（瀬底）
s2　すんちゃー　（長浜・伊良皆）
s3　すんちゃーまぢむん　（湧川）
s4　しばー　（与那）
s5　すーかー　（宜名真）
s6　すんかみやー　（宜名真）
s7　せーまーぐゎー　（汀間）
t　たんがい　（田嘉里）
u1　うみまー　（城）
u2　うみまやー　（数久田）

分布図を示すと次の通りである。

Hosei University Repository

ピキンキル系の妖怪



この妖怪について地元では次のように語っている。

(1) 川や海にいて、子供が一人で泳いでいると、足を引っ張って溺れさす。（宇嘉・辺野喜・喜如嘉・北里・田井等・渡嘉敷・長浜・佐敷）

(2) 川で渦巻くところにいる（謝名城）

(3) 海のマヂムンで波をたてて泳いでいる。子供が一人で泳いでいる場合に　すんかみやーに　すんかりーんどー（スンカミヤーに引きずり込まれるぞ）と言って注意をした。

(4) スンカーというのは、引きずり込むもの・妖怪の意味。水の中に引っ張り込んで溺れさす妖怪。（源河・瀬底）

(5) ヒサヒッパヤーというのは、足を引っ張るもの・妖怪の意味。川や海などにいて足を引っ張って溺れさすものである。（安富祖・堀川）

(6) 海岸や浜辺に現れる。（平安座）

(7) カーガーマヂムンとは、川の妖怪という意味。川や海にいて人の足を引っ張って溺れさす。（渡嘉敷）

(8) ビーチョーは、水の中に住んでいる。特にクムイ（深み）になっている所にいる。人間の格好をしていて青色である。（天仁屋）

(9) 子供を海に引きずり込んで溺れさす。夕方波打ち際に打ち寄せて来る波に乗って来ると思われて

Hosei University Repository

いた。そこで次のような文句をいってからかい遊んだ。

せーまーぐゎー　せーまーぐゎー　ウーてぃくーよー

せーまーぐゎー　びんぎてぃみしら

と言って、海に砂を投げた。

(10) カーブラングヮは、河童みたいなもので、川にいる。子供が一人で泳いでいると溺れさす。（久志）

(11) ヂャナガグムヤーで亡くなった人のマブイが、そこで人を水の中に引きずり込む。（浦添市西原）

(12) サブロー川（浜崎川）には、まやーさーが　ういんどー　と言う。（屋比久）

(13) 昼夜問わずどこにでも現れる。深川で足を引っ張り人を困らす。普通タンガイというが別名サナギインダサ（ふんどしを濡らす奴）と言う。（田嘉里）

(14) 川で遊んでいる子どもに川上から、シバーが流れて来るので早く上がりなさいと大人達がいっていた。（与那）

(15) 海にいるのを特にウミマーという。足を引っ張って溺れさす。（安和）

(16) ツースンチャーは浅瀬にいて、人を深みに引き込む。マーは深みにいてタコや入道雲の形をして人を引き込み溺れさす。溺れた人の霊だとも言う。次の犠牲者を出さないと成仏できないようである（川田）。

この妖怪が、何をするかというその行為から名付けられたのが多い。スンクン・ヒッパイン・ピキンクン（引く・引っ張る・引きずり込む）という動作をするものスンカー・スンチャー・ヒッパヤー・ピキンキル・ピキンキルルがこれである。人を引きずり込むのでツースンカー・ツースンチャー・ツーヒッパヤーであり、足を引っ張るのでピサスンチャー・フィサスンカー・ヒサスンカー・ヒサスンチャー・アシスンチャー・フィサヒッパヤー・ヒサヒッパヤー・アシヒッパヤーである。人を溺れさすものだからツーウブカサーである。それを神としたり魔物としたりしたのがピキンキガミ・ピキガミ・スンチャーマヂムン・フィキンキムンである。

タンガイは死の予兆を表す火の玉・明りをさすが、田嘉里ではこれが人を溺れさすようである。また汀間のセーマーグヮーもブナガヤ系のセーマとは異なるようである。

カーマヂムン・ハーマヂムン・カーガーマヂムンは、川の魔物という意味の呼称である。

マーが魔物の魔なのか知らないが、城では海にいるのをウミマーといい、川にいるマーと区別している。

ビーチョーのビーは川の堰、チョーは水門・出入口・門の意である。それからきた名称か。フカゾークークーの名称のフカゾーは、海の深い流れのある場所をさすようであり、クークーは、擬声語のようでもあるが未詳。カーブラングヮは川と、クヮガムヤー・クヮーガンムヤは子と、ウミマヤーは海と関わる言葉であろうか。シバー・スーカー・スンカミヤーも未詳。

Hosei University Repository

マーという呼び名が名護以北川田までの八部落にみられる外はシッキー系のようにグループを示さない。

（四）動物の妖怪

これまで述べてきた妖怪の分類基準とは別にここでは動物の姿をしたものとしてまとめた。家鴨・山羊・犬・猫・豚・牛・兎に化けたのがこれである。その呼び名と分布は次の通りである。

a1　アひらーまぢむん（西新町・大里）
a2　アふぃらーまぢむん（辺土名・許田・辺野古・松田・佐敷・屋比久）
a3　アぴらーまぢむん（振慶名）
h　ひーぢゃーまぢむん（大宜味・漢那）
p1　ぴぢゃーまぢむん（奥間・半地・振慶名）
p2　ぴーだーまどぅむん（奥）
I1　イんまぢむん（辺野古・渡嘉敷）
I2　イんぐゎーまぢむん（伊良皆）
I3　イんぬっくゎまぢむん（安波・奥間）
m　まやーまぢむん（辺土名・安部・伊良皆・渡嘉敷）

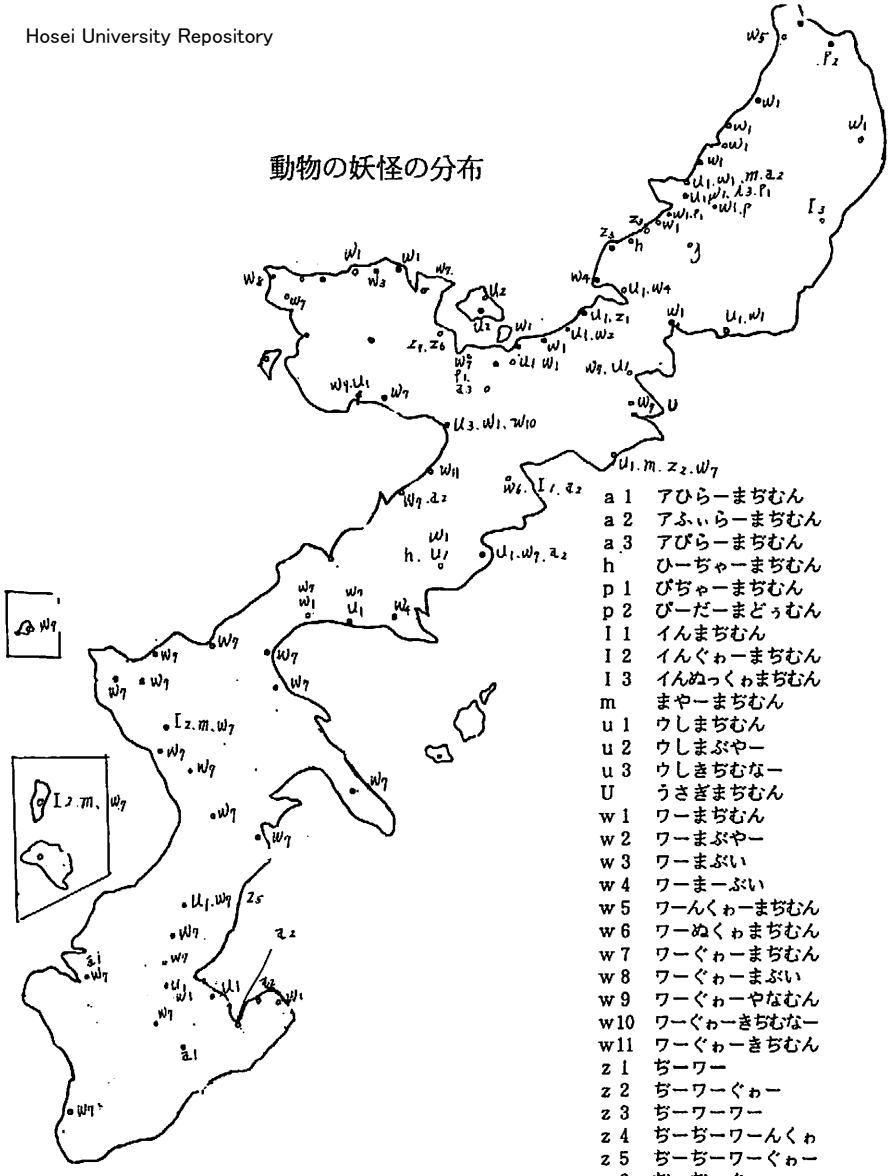
u1　ウしまぢむん（辺土名・奥間・田港・津波・川田・有銘・源河・川上・安和・安部・松田・漢那・伊芸・我如古・与那覇・当添）
u2　ウしまぶやー（済井出・饒平名）
u3　ウしきぢむなー（城）
U　うさぎまぢむん（天仁屋）
w1　ワーまぢむん（安田・辺野喜・謝敷・与那・宇良・辺土名・奥間・比地・半地・浜・川田・平良・稲嶺・仲尾次・川上・謝名・与那嶺・城・漢那・屋嘉・与那覇・仲伊保）
w2　ワーまぶやー（源河）
w3　ワーまぶい（平敷）
w4　ワーまーぶい（金武）
w5　ワーんくゎーまぢむん（宜名真）
w6　ワーぬくゎまぢむん（辺野古）
w7　ワーぐゎーまぢむん（有銘・天仁屋・安部・振慶名・仲宗根・北里・屋部・許田・松田・伊芸・屋嘉・仲泊・長浜・波平・喜名・伊良皆・嘉手納・吉原・石川・昆布・与那城町西原・普天間・泊・我如古・西原・経塚・西新町・喜屋武・糸満・粟国村浜・渡嘉敷）
w8　ワーぐゎーまぶい（備瀬）

Hosei University Repository

w9　ワーぐぁーやなむん（安和）
w10　ワーぐぁーきぢむなー（城）
w11　ワーぐぁーきぢむん（数久田）
z1　ぢーワー（津波）
z2　ぢーワーぐぁー（安部）
z3　ぢーワーワー（喜如嘉・根路銘）
z4　ぢーぢーワーんくぁ（塩屋・田港）
z5　ぢーぢーワーぐぁー（我如古）
z6　ぢーぢーぐぁー（湧川）
z7　ぢーぢーまぢむん（湧川）
j　やなむん（謝名城）

アヒラー・アフィラー・アピラーは家鴨、ヒーチャー・ピチャー・ピーダーは山羊、イン・インゲァ・インヌックァは犬、マヤーは猫、ウシは牛、ウサギは兎、ワー・ワーグァ・ヂーワー・ヂーワーグァー・ヂーワーワー・ヂーヂーは豚・ワーンクァ・ヂーヂーワーンクァは子豚、ヤナムンも魔物・嫌なものでここでは豚の妖怪を指すという。その分布図は次のようになる。

動物の妖怪の分布



a 1　アひらーまぢむん
a 2　アふぃらーまぢむん
a 3　アびらーまぢむん
h　ひーぢゃーまぢむん
p 1　ぴぢゃーまぢむん
p 2　ぴーだーまどぅむん
I 1　イんまぢむん
I 2　イんぐぁーまぢむん
I 3　イんぬっくぁまぢむん
m　まやーまぢむん
u 1　ウしまぢむん
u 2　ウしまぶやー
u 3　ウしきぢむなー
U　うさぎまぢむん
w 1　ワーまぢむん
w 2　ワーまぶやー
w 3　ワーまぶい
w 4　ワーまーぶい
w 5　ワーんくぁーまぢむん
w 6　ワーぬくぁまぢむん
w 7　ワーぐぁーまぢむん
w 8　ワーぐぁーまぶい
w 9　ワーぐぁーやなむん
w10　ワーぐぁーきぢむなー
w11　ワーぐぁーきぢむん
z 1　ぢーワー
z 2　ぢーワーぐぁー
z 3　ぢーワーワー
z 4　ぢーぢーワーんくぁ
z 5　ぢーぢーワーぐぁー
z 6　ぢーぢーぐぁー
z 7　ぢーぢーまぢむん
j　やなむん

Hosei University Repository

この動物の妖怪について村落で語っていることを少し紹介する。

1. 豚の妖怪

(1) 子豚の妖怪で、夕方または夜道路を歩いている。それに股下をくぐらすと魂が抜き取られる（辺野喜・与那・仲尾次・仲宗根・北里・我如古・渡嘉敷）。

(2) 女性に化けたり猫に化けたりして人を惑わす（浦添市西原）。

(3) 子豚の妖怪で現れる場所は限定されている。股からくぐらすと命がとられるので、走って来るのが見えると急いで股を閉じた（天仁屋）。

(4) 白豚の妖怪である（喜屋武）。

(5) 股下をくぐらしたら命をとられる。外出から戻ってきたら豚小屋に言って豚を起こして鳴かせてマヂムンをおっぱらった（石川）。

(6) 子供の頃夕方まで遊び惚けているとそれが出て咬むので早く家に帰りなさい、といって注意された（喜名）。

(7) 昼夜区別なく特定の場所に現れた。股下をくぐらすとマブイを抜き取られたという（宜名真・辺土名）。

(8) 豚の妖怪で、股下をくぐられるとシー（精気）が抜き取られてしまう。その時は、マブイグミ（魂込め）をしてもらう。いつまでも遊んでいる者（アシビブリ）に対して言う（城）。

(9) 死体を乗せて野辺送りする時に用いる龕を焼いたのでそれが豚に化けて出たという。魂をとる（我如古）。

(10) 小さな豚の妖怪でウフミチメーなどの道をよく歩いていた。股の下をくぐらすと魂・命をとられるという（喜如嘉）。

(11) 屋敷に入ったら厄が出るので、それを防ぐために門に灰を撒いた（安和）。

2. 牛の妖怪

(1) マルグムヤーという池にいた。そこは牛馬を浴びせる場所であった。そこで溺れた人はこの魔物のせいであったと言われている（我如古）。

(2) 牛の姿をした妖怪（済井出・饒平名）

(3) ガンヤーの近くの畑によく出た。逃げると突き飛ばされるので、角を捕まえて対抗した。角を捕まえて相手をねじ伏せてやっつけた積もりだったが、翌日その場に行ってみると堆肥がばら撒かれていた（城）。

(4) ガンが牛に化けた物だという（松田）。

(5) 死んだ牛馬を埋めた場所に出た（川田）。

(6) 真っ黒い牛でこれを避けようとして崖から落とされた。事故に遭う兆しという（津波）。

Hosei University Repository

(7) 屋敷にはいると厄が入るのでこれを避けるために門に灰を撒いた（安和）。

3. 家鴨の妖怪

(1) 夜現れる。人の魂をとる（那覇）。

(2) 数がどんどん増えていった。褌を外し振り回すとこの妖怪は逃げていった（辺野古）。

4. 山羊の妖怪

(1) 学校の運動場で群れをつくって人を追いかけ惑わす（大宜味）。

5. 兎の妖怪

(1) 人をどんどん崖っぷちに誘い込んでいって落とす。有津から有銘の松の下によく出た（天仁屋）。

6. 犬の妖怪

(1) 犬の姿をして人を惑わし魂をとる（渡嘉敷）。

(2) この妖怪が現れた家は火事になる（辺野古）。

7. 猫の妖怪

(1) 猫の姿をして人にまといついて魂をとる（渡嘉敷）。

これら動物の妖怪は、人を惑わし魂・命をとる、また門にはいるとそこに不幸を招き、その前ぶれをなすようである。

そして豚の妖怪は各地域に分布し、他の動物の妖怪の分布は群れをなさない。それは豚が沖縄の各家庭で飼育されていたのに対して、他の動物の飼育は村落が限定されていたためではないだろうか。

（五） 物の妖怪

物に化けて襲いかかってきたり、惑わしたりする妖怪である。これには次のような妖怪がいる。

c1 ちにぶやなむん（屋比久）

c2 ちにぶまぢむん（我如古）

d だんがさまぢむん（辺野古）

F ふーまぢむん（辺野古）

g がんまぶい（備瀬）

p3 ぷーまぶい（備瀬）

チニブヤナムン・チニブマヂムンのチニブとは竹でできた垣のこと。竹垣の魔物・妖怪という意味である。これを波うたせ倒し夜歩いている人に襲いかかって来るようである。

Hosei University Repository

ダンガサマヂムンのダンガサは雨傘のことでこれに化けた妖怪という意である。辺野古の近くのカタバル（潟原）の地に出て人を惑わしたようである。

フーマヂムンのフーは、帆のこと。舟の帆みたいな妖怪で空一杯に広がって人を襲ったようである。プーマブイのプーは帆の意味であり、それを立てて道につっ立っていた妖怪だという。この備瀬の妖怪と辺野古のフーマヂムンとは性格が異なるようである。

ガンマブイは、死者を棺に入れ、それを乗せて野辺送りする時に用いる器具であるガンに化けたり、それを引きずっている妖怪だという。

（六）その他の妖怪

これまで述べてきた妖怪と多少異なるものや正体のはっきりしないのをさす。これには次のような妖怪がいる。

a1　アかなー（具志川村具志川）
a2　アかなーまぢむん（宜名真）
I　イしなぎまぢむん　（伊豆味）
j　やままぢむん（漢那）
k1　かーがりもー（首里）

k2　かむろー（那覇）
p1　ぴーしきやー（城）
p2　ぴーしきまぢむん（振慶名）
s1　しち（城）
s2　しちまぢむん（屋嘉・石川・伊波・昆布・嘉手納・大山・我如古・海野）
s3　しーちまぢむん（屋嘉）
s4　しっちまぶい（安富祖）
s5　しのーいぐわー（数久田）
u　ウちがなしー（伊芸）

アカナーは、具志川村具志川にいたようである。火の玉となって近づいて来て漁師がとった魚の目玉をとって食べたようである。これは、田井等のボーヂマヤーに似ている。が、寝ている人を押え込んで金縛りにするのはキヂムナーと言って区別している。アカナーというのは赤い色をしていたことによるものであろう。

アカナーマヂムンは、宜名真で夕方に現れたようである。幽霊みたいなものというが正体がはっきりしない。

Hosei University Repository

イシナギマヂムンは夜更けに家や道を歩いている人に石を投げつける妖怪だという。

ヤママヂムンは、猫や火の玉になって人にまとわりついて惑わす妖怪だという。

カーガリモーやカムローは河童のような妖怪だという。（カムロは国立国語研究所編『沖縄語辞典』昭和三十八年による）

ピーシキヤー・ピーシキマヂムン・シノーイグワーは、ピー（火）をシキル（つける）妖怪だという。フクギ並木道を歩いている時、夜漁をしていると灸をすえるようである。後のところはブナガヤと似ている。

シチは、フクギ並木も覆い尽くす程の大きな帆・布となってその人と周囲を包み込んで人心を惑わす妖怪だという。

シッチマブイは恩納と安富祖の間で黒い棒のようにつっ立って出たようである。背比べをしてそれより背が低いと魂が抜かれるので、松の枝やススキでサンを作り持ち上げて歩いた。そして「ヤーや　しちやれー　わんや　はちどー（きみは七であっても私は八だぞ）」と言って、挙げた両手の親指を曲げて八の数を示してそれを除けたと言う（安富祖）。

シチマヂムンについて、我如古では次のような話がある。当山と嘉数の村境の道に出たと言う。猫になったりタマガイ（火の玉）になったりしてまといつき、帰宅を邪魔するので、これはシチマヂムンと知り、すばやく褌を外しぐるぐる回転させ、「ヤーや　しちやてぃん　わんや　はちどー」といって除けたと言う。

昆布や屋嘉では、伸縮自由自在、あらゆる動物に化けることができる一番怖い妖怪だと言われている。

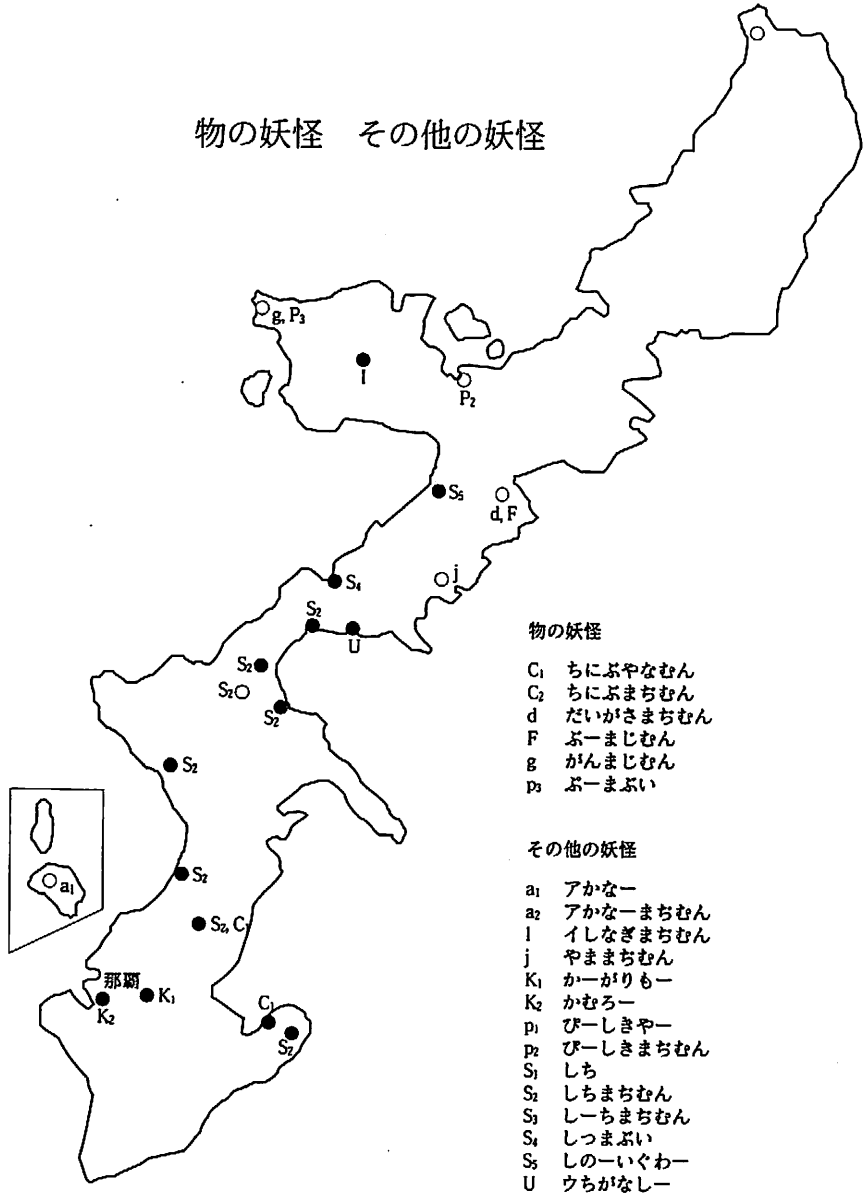
シチは、物の妖怪とせずに、シッチマブイ・シチマヂムン・シーチマヂムンの同一の妖怪の村落による呼び方の違いであろう、と言うことでここに入れた。辺野古のフーマヂムンも類似するところがあるが、帆という物の名がついているので前に分類した。

ウチガナシーは、どのような妖怪であるか不明。

（五）物の妖怪と　（六）その他の妖怪を一つ分布図で示す。

Hosei University Repository

物の妖怪　その他の妖怪



物の妖怪

C_1　ちにぶやなむん
C_2　ちにぶまちむん
d　だいがさまちむん
F　ぶーまじむん
g　がんまじむん
p_3　ぶーまぶい

その他の妖怪

a_1　アかなー
a_2　アかなーまちむん
I　イしなぎまちむん
j　やままちむん
K_1　かーがりもー
K_2　かむろー
p_1　ぴーしきやー
p_2　ぴーしきまちむん
S_1　しち
S_2　しちまちむん
S_3　しーちまちむん
S_4　しっまぶい
S_5　しのーいぐわー
U　ウちがなしー

三、最後に

資料提供の積もりで述べてきたが、心に残ったことなどをまとめておきたい。

キチムナーに惑わされたり襲われたりした辺土名の親川氏が、その恐怖の体験を熱ぼく語る口調とその呪縛から逃れたいきさつを語る安堵した話ぶりは、体験した人にしか見えない表情であった。人間社会のすぐ隣に人間の常識を超えた異界が存在し、そこを侵したために仕返しをされた恐怖とそれから解き放たれた者の顔であった。

また我如古の又吉氏や安富祖出身の島袋氏が、妖怪の中で最も恐れられている変化自在のシッチマヂムン・シッチマブイを息もつかせぬ勢いと柔和な口調を交えて語っていたのは、数字で「七」より「八」が大きいことを示すことによって、その呪縛から逃れることができると言うユーモアに溢れた方法があることを体験者に語って貰い、知っていたからにほかならない。猫や火の玉などいろいろな物に化け襲いかかって来るという妖怪が、たあいもない方法で退けることが出来るという気持ちの表れでもあろう。ひょっとすると、これは作り話ではないか、と言う気持ちかも知れない。でも恐ろしい。

宜名真では、長時間海で泳ぎ遊んでいる子供たちを陸に上げるために大人がぼろを纏いミンコーハーメという妖怪になって脅かした、と宇良氏は語っていた。この辺りに妖怪の誕生はあるのかも知れない。むやみやたらに自然を傷つけてはいけない・一人で山に入ってはいけない・一人で川や海で

Hosei University Repository

泳いではいけない・夜遅くまで遊んではいけないなどという背景からも妖怪は生まれてきたようである。諸々の予期せぬことから村落共同体の命を護る意思・愛情の表れとして妖怪は生まれ、それに畏敬の念を払うことによって秩序ある社会は支えられてきたとも言えよう。

このようにして、畏怖すべき妖怪の住めない現代社会は寂しいものである。

沖縄の妖怪を、ブナガヤ系の妖怪・シッキー系の妖怪・ピキンキル系の妖怪・動物の姿をした妖怪・物の形をした妖怪・その他の妖怪と分類してみてきた。どれだけ全体像に迫れたか心許ないが、一応の報告にかえたい。

調査でご協力くだされた多くの方々や論文発表の機会をくだされた法政大学沖縄文化研究所の方々に心からお礼申し上げたい。

なお、本稿は昨年十一月の沖縄文化協会設立四十五周年記念研究発表会のものに臨地資料を新たに加えたものであることを記しておく。（一九九四年八月十五日稿）